

想像力とN I E

長野県新聞活用教育(N I E)推進協議会長
信州大学学術研究院教育学系教授

松本 康



個人的な感覚では、20世紀の終わりごろ想像していた「21世紀」と、現在の私たちの生きている21世紀とは、ずいぶんかけ離れたものになってしまった。私が物心ついた1960年代に語られていた「21世紀」は楽観的だった。「原子力」「科学技術」「未来」は肯定的な言葉で、「人類の進歩と調和」(70年万博テーマ)が実現された、明るい「21世紀」が来るものと思い込んでいた。

だが状況はもっと複雑だった。1989年にベルリンの壁が崩れ、東西冷戦が終了した時、これからは地域紛争や民族問題・宗教問題が吹き出すとか、資本主義への一極化が貧富の差を拡大させるとか、漠然と予想されていた。けれども、具体的にどのような問題が生まれるのか、はつきりとは想像できなかった。

2001年9月11日、崩れ落ちるNYのツインタワーの光景は、アメリカの凋落の始まりを予感させた。テロと恐怖、憎悪と復讐によって21世紀が始まり、アフガニスタン侵攻とイラク戦争は中東をより不安定にした。イラク戦争が始まる時、10数年後にISが脅威を振るうことや、テロが拡散することや、100万人を越える難民がヨーロッパに押し寄せることを誰が予想できただろうか。

新自由主義とグローバリズムは国境を越えた資本や人の移動を自由にしたけれども、その反面、一部の人々や企業への富の集中を生み出し、不平等を拡大させた。2011年の東日本大震災は日本が自然災害大国であることを思い出させたし、「想定外」の福島第一原発事故は「科学技術」への盲信を打ち砕いた。地球規模の環境問題がじわじわと厳しさを増していることは今まさに実感できる。

21世紀になったからといって、人間が急に賢くなったわけではない。20世紀から持ち越されていた問題や隠れていた問題は、当たり前になり21世紀につながっていた。今の私たちは現在進行形のひとつひとつの問題に、注意深く向き合わなければならない。20世紀と異なるのは、世界が相互により深く結ばれており、起こりうる問題の複雑さが増したことである。あらゆる問題がつながり、良いことも悪いことも、あらゆることから相互に影響を及ぼす。今まで通りの解決法が通用しないならば、起こりうることごとについて、せめて最大限の想像力を働かせなければならない。

社会学者のライト・ミルズ(1916-1962)は自分の生活と社会や歴史とのつながりを想像する力を「社会学的想像力」と呼んだ。「想定内」の枠組みに閉じこもっては、想像力は育ちにくい。学校のカリキュラムをはみ出した情報を提供できるところが新聞の良さである。新聞を読むことの大きな意味は、世界に起こりうること、自分の身近に起こりうること、それらのつながりについての想像力を養うことである。そのために、NIEはもっとはみ出した実践に挑戦しても良いのではないだろうか。